

八 妻 飾

切妻造や入母屋造の表面の意匠をいう。主な形式を次ぎに上げる。

1 派 投 首 首
垂直の投首東と二本の投首平(斜材)とによって構成する妻飾をいう(図2-9a)。

2 虹梁大瓶束

虹梁の中央に大瓶束を立てて棟木を受ける妻飾をいう。虹梁は社寺建築に用いる化粧を兼ねた梁をいう。大瓶束は、断面がほぼ円形で、下方にゆくに従い細くなり、形状が瓶子に似ているのでこの称がある(図2-9b)。大瓶束の下部の彫刻は結締または綿花、束の左右に取り付けられる彫刻は笈形と呼ぶ。

3 二重虹梁大瓶束

虹梁を二重に架け、上部虹梁に大瓶束を立てて棟木を受ける妻飾をいう(図2-9c)。

九 細 部

図2-10に一般的によくみられる一間社流造の細部名称を示す。

(村田)

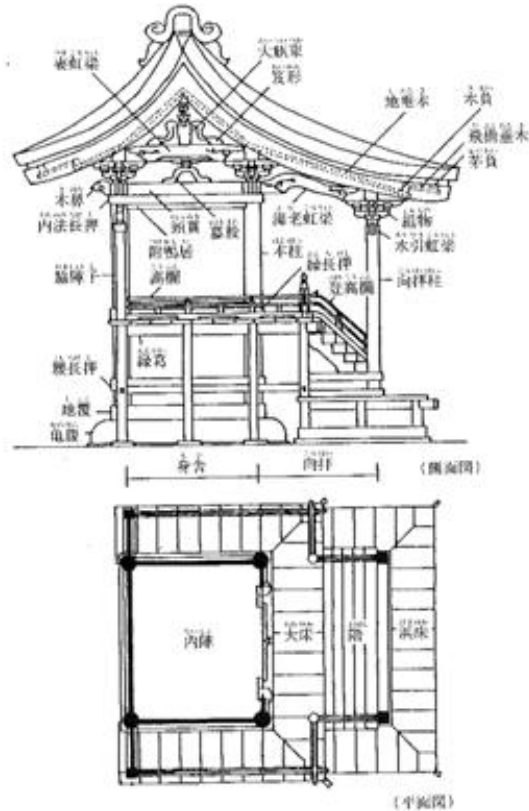


図2-10 本殿(一間社流造)の細部名称 (『日本建築・下巻』から作成)

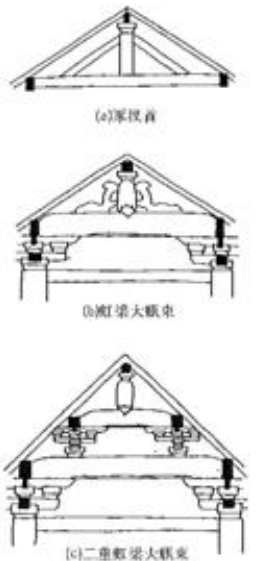


図2-9 妻飾

第三章 各神社の建築解説

第一節 第二次調査の対象となった遺構

本項は表1-2の順に従って解説する。また、明治時代以降(推定も含む)に建造した遺構、明治前に建造したと推察する小規模な遺構及び神社建築としての形態をなしていない遺構などは、次項のその他の遺構でまとめて取り上げる(表3-22)。ただし、第二次調査の対象となった遺構を残す神社のその他の遺構に該当するものについては本項で取り上げることとする。

各遺構の建造年代の判定には、当地区の年代の明らかな遺構、後述の資料「時代の変遷による細部意匠の変化」の諸点、既刊の他地区の近世社寺建築に関する報告書等を参考にした。

(村田)

一 玉村八幡宮(下新田)

「上野国那波郡玉村府内角廻八幡宮縁起」及び「上野国玉村八幡宮本紀」によれば鎌倉時代の建久六年(一一九五)に源頼朝が鎌倉鶴ヶ岡八幡宮の分霊を勧請したのが角廻八幡宮のはじめと伝えている。その後、永正四年(一五〇七)に社殿を建造し、伊奈備前守が玉村に新田を開き、慶長一五年(一六一〇)に現在地に遷宮したものが現在の玉村八幡宮の本殿であるという。当神社は多数の棟札を残しており、明治時代前まで遡る建物関係の

ものだけでも九枚ある。しかし、この中に両者の縁起にみる本殿の永正四年や慶長一五年の建造や修理などの年代を直接裏付けるものは見当らない。

境内の配置(図3-1)

(村田)

当神社は玉村町はもとより、県下でもその規模・格式において、最上級に位置する。境内は大変広い。敷地は大きく分けて二つの地域から成り立つと考える。一つは、神に祈る空間でホンデンを中心とするいわば神域である。もう一方はシャムシヨを中心とする宮司の生活空間の地域である。神域は周囲を濠で囲み、敷地の北側に位置する。宮司の居住する生活空間の地域はその南側にある。

まず南側より見ると、園道より大きなトリーをくぐり、サンドウを北に進むと、ズイシンモン(随神門)がある。門の左右には立派な衣裳を身につけたズイシン様を見受る。サンドウを進むと、東側にシャムシヨがある。そしてシャムシヨの東に宮司の居宅があり、その北側にタマムラハチマングウサンシユウデンを見る。シャムシヨの前サンドウ両脇にコマイヌ(昭和二年建造)があり、コマイヌの北西には自動車交通安全祈願所がある。サンドウを進むと一対の灯籠がある。さらに進み、神域付近になると、西側にテンスイシヤ(昭和九年建設)がある。神域との区切りとなる濠付近には、まず左右に灯籠を置き、そのすぐ奥にミカゲ石のトリー(昭和一〇年建設)が立っている。

石橋を渡って神域に入ると、まず左右に灯籠がある。その正面にハ